

**ANALISIS MAKNA MAJAS SIMILE YANG MENGANDUNG NAMA
BINATANG DALAM NOVEL *RASHOOMON* KARYA AKUTAGAWA
RYUUNOSUKE**

**Fernanda Ramadhan
43131.520150.057**

**STBA JIA
2020**

ABSTRAKSI

Skripsi ini menjelaskan tentang majas simile merupakan majas perbandingan dari penyamaan yang bersifat langsung dan eksplisit. Perbandingan secara langsung ini ditandai dengan penggunaan kata pembanding diantaranya seperti, bagaikan, dan sebagainya. Fungsi dari penggunaan majas untuk memberi kesan dan pemahaman bagi pembaca. Kalimat majas yang dijadikan sumber data dalam penelitian ini di ambil dari novel *rashoomon* karya Akutagawa Ryuunosuke. *Rashoomon* merupakan novel yang berisikan kumpulan-kumpulan cerpen yang isinya berceritakan hal-hal aneh atau misterius sehingga pembaca pun akan tertarik dengan novel ini. Tujuan dari penelitian ini adalah untuk mengetahui bagaimana penggunaan, makna dan fungsi majas dalam kutipan kalimat. Data dikumpulkan dengan cara membaca tiap kalimat, mengelompokkan kalimat yang mengandung majas simile, menerjemahkan kalimat tersebut, kemudian menganalisis sesuai dengan rumusan masalah yang ada. Hasilnya, kutipan kalimat dalam novel *Rashoomon* karya Akutagawa Ryuunosuke, terdapat 22 kalimat majas simile. Simile yang paling dominan penggunaannya adalah simile yang menggunakan のように sebanyak 54,54%, simile yang menggunakan のような sebanyak 22,72%, simile yang menggunakan ように sebanyak 13,63%, simile yang menggunakan ような sebanyak 4,54%, simile yang menggunakan も同然 sebanyak 4,54%, majas simile dalam novel *Rashoomon* karya Akutagawa Ryuunosuke ini berperan untuk memberikan penekanan terhadap perasaan seseorang, menggambarkan keadaan yang di alami oleh seseorang, dan penekanan terhadap sesuatu.

Keyword : Majas, Simile, Rashoomon

「赤川龍之介の作品『羅生門』小説に動物名を含むの直喩の意味論」

Fernanda Ramadhan

43131.520150.057

STBA JIA

2020

要旨

本論文では、日本語における直喩の表現体とその意味を分析する。直喩は、「みたいな」とか「のような」などのように、「たとえ」であることが明らかになっている表現方法を採用しているタイプのことをいいます。「たとえるもの」と「たとえられるもの」とが、「たとえ」だと分かる目印によって結びついているもの。それが、「直喩」です。なので一つ、たとえることになる、もともとの言葉。たとえとして使われることになる言葉。その二つを結びつけて、どこが似ているのかを示す言葉。という三つをそろえることで、「直喩」をつくりだすことができます。本論文の分析対象は赤川龍之介の小説羅生門である直喩における直喩を分析します。羅生門「らしょうもん」とは、読者がこの小説に興味を持ってもらえるように、奇妙なことや不思議なことを伝える内容の短編小説を集めた小説である。この分析の意思は赤川龍之介の小説羅生門における直喩はどうやって使いますか、意味歯は何ですか、そして役割は何ですかとします。読者のための印象と理解を与えるための直喩の図の使用の機能である。赤川龍之介の小説羅生門における直喩は22であることが分かった。「のように」を使い直喩は54,54%があり、「のような」を使い直喩は22,72%があり、「ように」を使い直喩は13,63%があり、「ような」を使い直喩は4,54%があり、「も同然」を使い直喩は4,54%があり。

キーワード：隠喩、直喩、羅生門

第一章

はじめに

概要

A. 背景

言語の意味と目的の表現は、連想的な意味を含む特定の側面で装飾されていることがあります。この意味は、言語を他の側面、たとえば、たとえ、言葉の図などと結び付けた結果として生じる意味である。この意味は、単語の元の概念と同様の特徴、特性、または条件を持つ別の概念を表すために使用される類推に似ています。連想的な意味を使用する言語の一つは言語隠喩である。

1. 背景によると、問題は：

- a. 赤川龍之介の作品『羅生門』小説に動物名を含むの直喩は何であるか
- b. 赤川龍之介の作品『羅生門』小説に動物名を含むの直喩の使い方はどのようなようであるか

第二章

理論的な基礎

A. 意味論

府川 (2005,1) によると、「意味論は言語形式の表す意味を語・句・文・談話それぞれのレベルにわたって研究する言語学の分野」である。

B. 言葉の意味論

単語の意味を研究または与えることで、他の単語と異なる単語を作る意味関係に関して、単語を理解すると述べている Lyons(1977, 204)。

C. 種類の隠喩

比喩はその対象の特徴や状況を意味の違うほかの語を持って連想や類推させる表現手段である。(Morita dalam Nurhadi, 2010)

D. 直喩

のような」などによって類似性を直接表す比喩。しばしばどの点で似ているのかも明示する。(Seto, 2002)

E. 機能の隠喩

隠喩には、レトリックの一形態であり、すなわち、読者に影響を与えるために話したり書いたりする際の言葉の使用である。(Tarigan, 1986)

第三章

研究方法

A. 研究方法

本研究で用いた研究方法は記述的定性的研究方法である。本研究では、祇園祭で発生する交替の形態とその原因について説明する。

B. 研究対象とデータソース

本研究の主な目的は京都で行われた日本最大の祭りの一つである祇園祭で、本、雑誌、百科事典、論文などがある。

C. データ収集技術

記述的研究は、既存の現象の状態、すなわち研究の時点で何に応じて症状の状態に関する情報を収集することを目的とした研究である(Arikunto, 2009)。

D. データ解析技術

この研究の主な目的は、芥川龍之介の小説"羅生門"言葉のミルに見られる動物であり。

E. 研究プロセス

準備段階、実施段階、完了段階

第四章

議論と分析

No.	文	直喩シミリー	機能の直喩	独自隠喩
1.	選んで門の上へ持って来て、 <u>犬のよ</u>	<u>犬のように棄て</u> <u>られてしまうば</u> <u>かりである</u>	のように	説明

	<u>うに棄てられてし まうばかりである</u>			
2.	それから、何分か の後である。羅生 門の楼の上へ出 る、幅の広い様子 の中段に、一人の 男が、 <u>猫のように 身をちぢめて</u> 、息 を殺しながら、上 の容子を窺ってい た。	<u>猫のように身を ちぢめて</u>	のように	説明
3.	下人は、 <u>守宮のよ うに足音をぬすん で</u> 、やっと急な梯 子を、一番上の段 まで這うようにし て上りつめた。	<u>守宮のように足 音をぬすんで</u>	のように	説明

4.	<p>槍側色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、<u>猿のような老婆</u>である。</p>	<p><u>猿のような老婆</u> である</p>	<p>のような</p>	<p>風刺</p>
5.	<p>すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた屍骸首に両手をかけると、丁度、<u>猿の親が猿の子</u>の子の<u>をとるよう</u>に、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。</p>	<p><u>猿の親が猿の子</u> <u>のをとるよう</u>に</p>	<p>ように</p>	<p>風刺</p>
6.	<p>丁度、<u>鶏の脚のよ</u><u>うな</u>、骨と皮ばかりの腕である。</p>	<p><u>鶏の脚のよ</u><u>うな</u></p>	<p>のような</p>	<p>風刺</p>

7.	<p>睨の歩くなつた、 <u>肉食鳥のように</u>、 鋭い眼で見たので ある。</p>	<u>肉食鳥のように</u>	のように	皮肉な
8.	<p>こう云う例外を除 けば、五位は、依 然として周囲の軽 蔑中に、<u>犬のよう な生活を続けて行 かなければならな かった。</u></p>	<p><u>犬のような生活 を続けて行かな ければならなか った</u></p>	のような	風刺
9.	<p>その指貫の中か ら、下の袴もはか ない、細い足が出 ているのを見る と、口の悪い同僚 でなくても、瘦公 卿の車を牽いてい る、<u>瘠牛の歩みを</u></p>	<p><u>瘠牛の歩みを見 るような</u></p>	ように	風刺

	<p><u>見るような</u>、みすばらしい心もちがする。</p>			
10.	<p>色のさめた水干に、指貫をつけて、<u>飼主のない尨犬</u>のように、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き孤独な彼である。</p>	<p><u>飼主のない尨犬</u> <u>のように</u></p>	<p>のように</p>	<p>風刺</p>
11.	<p>操を藪られながら、その上にも鬼められていると云う事が、<u>丁度癩を病んだ</u>犬のように、憎まれながらも虐まれていると云う事が、何より</p>	<p><u>丁度癩を病んだ</u> <u>犬のように</u></p>	<p>のように</p>	<p>風刺</p>

	も私には苦しかった。			
12.	思えば狐の家を踏んで、 <u>物に狂うたのも同然じゃな</u> と、まるで御自分を廟るように、洒落としてこう仰有います。	<u>物に狂うたのも同然じゃな</u>	も同然	風刺
13.	その時の平太夫の姿と申しましたら、 <u>とんと窠にでもかかった狐のよ</u> うに、牙ばかりむき出して、まだ練りらしく喘ぎながら、身悶えしていたそうでございます。	<u>とんと窠にでもかかった狐のよ</u> うに	のように	風刺

14.	<p>車をめぐっていた覆面の頭が、互に眼と眼を見合わしながらに、一しきりざわざわと動くようなけはいがございましたが、やがてそれが又静になんりますと、突然盗人たちの唯中から、<u>まるで夜鳥の鳴くような</u>、段れた声が起こりました。</p>	<p><u>まるで夜鳥の鳴くような</u></p>	<p>ような</p>	<p>説明</p>
15.	<p>たとい嘘とは云うものの、ああ云う琵琶法師の語った嘘は、<u>つい涙さえ落としの虫のよう</u></p>	<p><u>つい涙さえ落としの虫のように</u></p>	<p>のように</p>	<p>風刺</p>

	に、末代までも伝わるでしょう。			
16.	ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちがのぼった後をつけて、 <u>まるで蟻の行列のよう</u> に、やはり上へ上へ心によじのぼって来るではございませんか。	<u>まるで蟻の行列のよう</u> に	のように	賞賛
17.	ですからさすが大泥坊の鍵陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、 <u>まるで死にかかった蛙のよう</u> に、唯も	<u>まるで死にかかった蛙のよう</u> に	のように	風刺

	がいてばかりおりました。			
18.	<u>それが蛤の貝のよ</u> うな、暖かい色をして いるのは、かすかな光の 加減らしい。	<u>それが蛤の貝の</u> ような	のような	賞賛
19.	すると甥は早くも身支 度を整えたものと見えて 、太刀の目釘を丁寧に潤 めしますと、まるで私に は目もくれず、そっと河 原蓬を踏み分けながら、 <u>餌食を覗う蜘蛛</u> のよう に、音もなく少室の外へ 忍びよりました。	<u>餌食を覗う蜘蛛</u> のように	のように	風刺

20.	<p>いや全く花火の朧げな光のさした、 蓆壁びにびったり 体をよせて、内の けはいを窺っている私の甥の後姿は、<u>何となく大きな蜘蛛のような気味の悪いものに見えたのでござ</u>います。</p>	<p><u>何となく大きな蜘蛛のような気味の悪いものに見えたのでござ</u>います</p>	<p>のような</p>	<p>命令</p>
21.	<p>甥と私とはこれを聞くと、<u>まるで綱を放れた牛のよう</u>に、両方からあの沙門を目蒐けて斬ってかかりました。</p>	<p><u>まるで綱を放れた牛のよう</u>に</p>	<p>のように</p>	<p>命令</p>

22.	五位は、 <u>両手を蠅</u> <u>でも逐うように動</u> かして、平に、辞 退の意を示した。	<u>両手を蠅でも逐</u> <u>うように</u>	ように	命令
-----	---	-------------------------------	-----	----

第五章

結論

赤川龍之介の小説羅生門における直喰は 22 であることが分かった。「のように」を使い直喰は 54,54% があり、「のような」を使い直除は 22,72% があり、「ように」を使い直除は 13,63% があり、「ような」を使い直除 4,54% があり、「も同然」を使い直除は 4,54% があり。